薩摩・大隅地方におけるハマ投げ： 始良郡加治木町の場合を中心に

山田 理恵¹⁾ 渡辺 融²⁾

Rie Yamada¹⁾ and Toru Watanabe²⁾: The playing styles of the Satsuma game of *hamanage*: Focusing on the rules of Kajiki Town (Aira County). Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 56: 47-60, June, 2011

Abstract : The traditional Japanese game in which players hit a wooden disk known as a *hama* with wooden sticks is considered to be derived from *gittyô*, which is believed to have originated from *dakyu*, which is believed to be derived from the stick game that was played in western Asia in ancient times. Therefore, traditional Japanese stick games and Western polo have the same origin.

In Kagoshima Prefecture, the game is called *hamanage* (literally, “disk-throw”), and it has been passed down in its traditional form through the Satsuma clan, having been performed by the children of *samurai* class in the old educational system (or *gojû kyôiku*) widely practiced since the Edo period. Today, the Kagoshima City *Hamanage* Preservation Society (Kagoshima-shi *Hamanage* Hozonkai), the Kajiki Town Association of Old Age Clubs (Kajiki-chô Rôjin-Kurabu Rengôkai), and the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya (NIFS) set each of the playing rules, which have been compiled along traditional lines.

The present study investigated the actual conditions of the Satsuma game of *hamanage*, focusing on Kajiki Town (Aira County). The sources used included mainly pictures and interviews with members of the Kajiki Town Association of Old Age Clubs collected by investigations, and game rule books edited by each organization.

In Kajiki Town, the Association of Old Age Clubs set the original rules of *hamanage* using modern elements while considering the safety of the older people playing these games, and a *hamanage* meeting has been held as a part of the New Year events since 1980. It can be said that the *hamanage* played in Kajiki is an exciting and traditional culture activity passed down since ancient times, and illustrates the ideal role of traditional sports in local areas.

Key words : traditional Japanese stick game, *hamanage*, Satsuma clan, Ôsumi district, Old age clubs

キーワード : 日本の伝統打球戯, ハマ投げ, 薩摩藩, 大隅地方, 老人クラブ

I はじめに

「ハマ」と呼ばれる木製の円盤を木の棒で打ち合う日本の民俗遊戯は、打毬だきゅうから生まれたと考えられる毬打ぎうちょう（徒歩で毬を打ち合う遊戯。「毬杖」とも表記する。）^{注1)}と同種の遊戯である。

打毬とは、騎馬または徒歩で、毬まりを毬杖きゅうじょうで毬きゅう

門もんに入れその数を競うという遊戯で、馬に乗って行う騎馬打毬と徒歩で行う徒打毬の2種がある。今日では、八戸市・長者山新羅神社で行われる奉納加賀美流騎馬打毬・徒打毬、山形市・豊烈神社で行われる奉納騎馬打毬・徒打毬、宮内庁主馬班に保存されている騎馬打毬をみることができる。この打毬は、古代西アジア由来の遊戯とされる（寒川、1994）ことから、「ハマ」を打ち合う

1) 鹿屋体育大学体育学部
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1

2) 東京大学名誉教授
連絡先 山田理恵

1. Faculty of Physical Education, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya
1 Shiromizu-cho, Kanoya-shi, Kagoshima 891-2393
2. Emeritus Professor of the University of Tokyo
Corresponding author yamada@nifs-k.ac.jp

打球戯も、西洋のポロと同じ源をもつ遊戯として位置づけられる。

その遊戯は、鹿児島県では、「ハマ投げ」という名称で、薩摩藩時代（慶長7年—明治4年：1602年—1871年）以来の伝統的な形態と勇壮な精神を継承して今日まで受け継がれ、定着してきた^{注2)}。

筆者らは、それを「薩摩のハマ投げ」と称し、日本の伝統打球戯の形態と変遷に関する研究の一環として、この遊戯に着目し、その形態と展開について明らかにしてきた（山田，2003；2004；2005；2007；Yamada，2008，渡辺，2007）^{注3)}。それらの成果は、次のようにまとめられる。

薩摩のハマ投げは、競技者が2組に分かれ、中央線を挟んで相対して縦列になり、木の枝を輪切りにした「ハマ」と呼ばれる円盤形の球を、「ボット」（「木刀」の鹿児島の方言）と呼ばれる木の枝を削って作ったスティックで打ち返し合うという遊戯である。競技は、一方の組の先頭の競技者が、「ハマ」がその厚み（側面）で地面を転がるように相手陣地に投げ入れて始まる。相手の組ではそれを「ボット」で打ち返し、以後「ハマ」が地面に倒れて止まる（「ハマ」の平面が地面に着いて止まる）まで、打ち返し合いが続けられる。「ハマ」は、動いていても（転がっていても、ノーバウンドでも）、その厚み（側面）で地面に立ち静止していても打つことができる。打ち返し損ねた「ハマ」が自陣内で倒れた場合、また誰も打ち返せずに「ハマ」が自陣を貫通した場合はその組の負けとなり、相手の組の得点となる。1人が何回打ってもかまわない。

鹿児島市破魔投げ保存会（後述）によると、島津第一代忠久（治承3年—嘉禄1年：1179年—1227年）の家臣たちが鎌倉で行っていた遊戯が、薩摩入部にともなってもちこまれたことが、薩摩国におけるハマ投げの始まりであるとされている。

藩政期鹿児島城下では、薩摩藩に固有の教育組織「郷中教育」^{注4)}における武芸の鍛錬を兼ねた遊戯として、ハマ投げが行われていた。ハマ投げは、近代鹿児島市においても、「郷中教育」の思想と形態を基盤とした「学舎」^{注5)}の教育のなか

で、男子の勇壮な遊戯として盛んに行われていたが、危険なことから道路でのプレイを禁じられたこともあり、大正末までに徐々に衰退した。第二次世界大戦により「学舎」は多くの舎員と舎屋を失い、一時活動を停止するが、戦後の復興のなかで、「郷中教育」の伝統を受け継ぐ青少年の教育のよりどころとして「学舎」を再建しようという気運が高まり、昭和26（1951）年に学舎連合会（現・鹿児島市学舎連合会）が組織された。そのような学舎の活動のなかからハマ投げ復活に向けての動きが生じ、昭和38年に破魔投げ保存会（現・鹿児島市破魔投げ保存会。以下「保存会」とする。）が発足、翌年の成人の日に保存会主催による第1回大会が開催され、伝統的競技法に則り薩摩のハマ投げが復活された。鹿児島市の正月の行事として開催される同大会（平成22〈2010〉年で47回を数える）には、小学生から高齢者に至るまで幅広い世代の男女が参加し、薩摩藩の勇壮な精神をしのびながらプレイを楽しんでいる。

現在鹿児島県では、保存会のほかに、始良郡加治木町（平成22年3月23日始良郡西部の3町が合併、同町は始良市加治木町となる）の老人クラブ、鹿屋体育大学によってもこの薩摩の伝統遊戯の競技法が工夫され大会が開催されており、その形態は、伝統に基づきながらもそれぞれで異なる。

鹿屋体育大学では、地域の伝統的な身体運動文化を掘り起こし継承していくことも大学の一つの役割であると位置づけ、保存会との共催により毎年「学長杯破魔投げ大会」を開催している。開学20周年記念事業として開催した平成13年の第1回大会から第3回大会までは、鹿児島市内の小中学校運動場を会場としていたが、平成16年の第4回大会からは、大学開放事業として、学園祭と併せて大学構内の広場で大会を開催している。同大学では、競技場の大きさの設定、安全面に配慮したフェイスガード付きヘルメットの着用の導入など、この伝統遊戯を現代スポーツとして普及させるための競技法が検討されている。

冒頭においても述べたように、筆者らはこれまで、日本の伝統打球戯の形態と展開を明らかにする研究の一環として、薩摩のハマ投げに着目し、

保存会と鹿屋体育大学の場合を中心に論じてきた。そのようななかで、さらに加治木町において行われているハマ投げについても現地調査を行い、その実態と特色を明らかにし、薩摩・大隅地方におけるハマ投げが、組織・担い手によってどのように目的や形態を変えながら行われているのかを明らかにする必要があると考えた。なぜなら、それを通して、日本の伝統打球戯の文化変容と現代への適応の過程の一事例を明らかにすることができるとともに、日本の伝統的な身体運動文化を再認識しそれを継承していくことの意義と課題を考察するための手がかりを得ることができるからである。

そこで、本研究では、加治木町において高齢者によって継承されているハマ投げに着目し、現地調査および資料調査を行い、その形態を明らかにするとともに、保存会、鹿屋体育大学における同遊戯の形態との比較を通して、薩摩・大隅地方におけるハマ投げの実態と独自性、文化的特徴について考察することを目的とした。

ところで、薩摩のハマ投げについては、筆者らが薩摩のハマ投げの研究に着手するまでも、スポーツ事典等において述べられてきている(寒川, 1994; 1998)が、それらの叙述は、民俗学的研究の成果をもとに競技法を紹介したものにとどまっている。また、瀬戸口(1995)は、保存会によるハマ投げの競技法と歴史性について述べているが、加治木町におけるハマ投げについては言及していない。

したがって、現在薩摩・大隅地方において行われているハマ投げの実態について、加治木町における場合を中心にそれぞれの形態を比較し、それらの独自性について明らかにする本研究は、日本の伝統打球戯の文化変容の過程を考察するうえで新たな知見をもたらすものであると位置づけられる。また、生涯スポーツとしての伝統スポーツ・遊戯の振興という視点からも、本研究の今日的意義があるといえる。

本研究で用いた主要資料は、加治木町老人クラブ連合会(始良市誕生に伴い、始良市老人クラブ連合会加治木支部に名称変更)によるハマ投げ大

会(平成19年の第28回大会および平成20年の第29回大会)における現地調査の結果得られた画像・資料、同大会への参加者をはじめ老人クラブのメンバーおよび加治木町役場(新市誕生後は、始良市役所加治木総合支所に名称変更)関係者へのインタビュー資料、加治木町のハマ投げに関する資料調査の結果収集した文献・史料などである。また、保存会、鹿屋体育大学による大会についても、平成19年と平成20年の大会(保存会の場合は、それぞれ第44回・第45回大会、鹿屋体育大学の場合は、それぞれ第7回・第8回大会。第7回大会には加治木町老人クラブ連合会からも2チームが参加)を中心に現地調査およびこれらの大会参加者へのインタビュー、資料調査を行ってきており、本研究は、それらの結果得られた画像・資料にも基づくものである。

Ⅱ 加治木町とハマ投げ

本章では、加治木町においてハマ投げがどのように展開してきたのかについて述べてみたい。

1. 加治木町の概要

加治木町は、薩摩半島と大隅半島が隣接する鹿児島県中部に位置し、鹿児島湾を臨む。旧国名では、大隅国(現在の鹿児島県東部および南西諸島にあたる)に属した^{注6)}。

島津家十八代義弘(天文4年—元和5年: 1535年—1619年)が加治木城に居を置き、十九代家久(天正4年—寛永15年: 1576年—1638年)が鹿児島城(鶴丸城)に移った後も、加治木は、薩摩・大隅両国間の主要街道が通る交通の要所となっていた。寛永8年家久の第二子・忠朗(元和2年—延寶4年: 1616年—1676年)が加治木島津家を創立、以降加治木島津家は、明治2年の版籍奉還(八代久寶〈嘉永9年—明治20年: 1852年—1887年〉の時)までこの地を治めた(家格は一門家)。(以上は、加治木町教育委員会, 1991, pp. 7-8; 加治木村同盟教育會, 1911; 鹿児島縣, 1943a; 1943c)

今日の加治木町の概要は、次のようにまとめら

れる。

加治木町は、標高100 m 以上の北部地域と鹿児島湾に面した平野の南部地域（全世帯のうち8割強が居住）に大きく分かれる。人口は平成2年以降減少傾向にあり、平成22年2月1日現在22,430人、全人口に占める65歳以上の人口の割合は平成20年で26.6%であり、年々高齢化が進んでいる。第三次産業従事者が多く、鹿児島市中心部から約20 km の距離に位置することから、鹿児島市内への通勤・通学者も多い。（加治木町ホームページ「加治木町の概要」「かじきの姿」）

すでに述べたように、平成22年3月23日、始良郡西部3町（加治木町・始良町・蒲生町）が合併し、始良市が誕生する。合併後、加治木町老人クラブ連合会は、始良市老人クラブ連合会加治木支部に名称変更する予定である。

2. 加治木町におけるハマ投げの展開

加治木町老人クラブ連合会のメンバーおよび同連合会によるハマ投げ大会を担当する町役場の関係者の言などから、加治木町におけるハマ投げの展開については、次のようなことが明らかとなった。

1) 加治木町における復活

加治木町でも大正初期頃までハマ投げが行われていたが、しばらく途絶えていた。故・肥田栄氏（明治36年—平成3年：1903年—1991年）がこの地で普及に着手したことによって次第に行われるようになった。鹿児島市内に居住していた肥田氏は、定年退職を迎え、昭和36年加治木町に転住、同町では書道塾を経営していたそうである。同氏は共研舎^{注7)}出身で、学舎時代にハマ投げを行っていたことから、加治木町でもぜひハマ投げを復活させたい、という動機からハマ投げを始めたという。

このようにして、肥田氏が、学舎時代に使っていたものと同形態の用具を作り、同様の競技法を伝えた結果、徐々にこの地でもハマ投げが行われるようになったのである。一古老の青少年時代の体験が、伝統遊戯を地元で復活させ定着させるきっかけとなったという経緯は、民俗文化伝承の形

態を考察するうえでもきわめて興味深い事例であるといえる。

なお、今日鹿児島市内で行われているハマ投げは、「郷中教育」の伝統を継承した青少年教育のなかで行われてきたものである（山田、2003；2004）。鹿児島城下の「郷中教育」では、「ハマ投げ」は武芸の身体鍛錬も兼ねた遊戯として盛んに行われていた。また、近代鹿児島市内では、「郷中教育」を継承した「学舎」の教育においても、この伝統遊戯が盛んであった（山田、2004）。

加治木町において大正初期頃まで行われていたハマ投げもまた、おそらく加治木の「郷中教育」と、それを継承した「学舎」の教育において行われていたと推察されるハマ投げの系譜をひくものと考えられる。今後さらに、加治木の「郷中教育」ではどのような身体鍛錬が行われていたのか、またそこでは「ハマ投げ」は行われていたのか、などについて史料収集を進め明らかにしていくとともに、加治木の「郷中教育」が近代の「学舎」^{注8)}の教育にどのように受け継がれたのか、ということも含め、加治木におけるハマ投げの由来と伝統性について明らかにしたいと考えている。

2) 『ハマ投げ基準書』の作成と改訂

加治木町におけるハマ投げの競技法には工夫が重ねられ、伝統的な競技法を逸脱しないように配慮しながら大会規則が定められ、昭和55年1月に第1回大会が開催された。以後、鹿児島県の伝統文化であるハマ投げの継承と地域交流を目的に毎年1月初旬（土曜日または日曜日）に大会が開催され（後述）、加治木町の正月行事として定着してきている。

冒頭においても述べたように、藩政期「郷中教育」では、ハマ投げは、勇壮な遊びとして武家の子弟の人気を集め、道路や馬場、空き地などにおいて、特に冬季に盛んに行われていた。さらに、学問や武芸の稽古などが行われない正月の休みには、武芸の稽古に代わる身体鍛錬として、このハマ投げが行われていた（山田、2003）。また、同遊戯は、「破魔投げ」とも表記される（後述）ことから、縁起物としても考えられる。これらの点から、薩摩・大隅地方では、正月の行事としてこ

の伝統遊戯が定着してきたと考察される。

加治木町におけるハマ投げの競技法には部分的に改訂が加えられており、平成2年1月、加治木町老人クラブ連合会体育保健部によって、『加治木町老人クラブ連合会ハマ投げ基準書』(以下、『基準書』とする。加治木町老人クラブ連合会体育保健部(編), 1990) が再版された。その「はじめに」では、次のように述べられている^{注9)}。

「このハマ投げ大会は、昔、明治、大正初期頃までは、男の子の遊びとして、盛んに行われていましたが、時代が進むに連れ、自然的に衰微していたものを、町老人会有志の方々が相図り復活せしもので、昔のハマ投げには難しいルール等はなかったのですが、団体競技をする上では、一定のルールが必要となり、故宇留島功・稲田進老連会長・肥田栄氏の方々がいろいろと協議の上、本来のハマ投げ遊びの基本を逸脱しないように配慮の上で現在のような基準ができました。従って、このハマ投げ大会は、遊びが基本でありますので、あまりに熱中すると、せっかくの伝統遊びの基本が崩れますので、このことを念頭において、楽しい正月行事として長く継続されることを願しつつ再版基準書を作成いたしました。」

現在では、平成5年10月に部分的に改訂され増版された『基準書』(加治木町老人クラブ連合会体育部(編), 1993) に基づいて大会が開催されている。なお、平成2年の再版は、肥田栄氏、稲田進氏両顧問の承認を得て行ったものであったが、説明不足や部分的疑義が指摘されたので、このたび改訂・増版するに至ったという経緯が、平成5年10月改訂・増版『基準書』の巻末の「増版を終えて」(執筆：小野良光氏〈老連体育部長〉)のなかで述べられている。

このように、素朴で明確なルールをもたなかったハマ投げを、鹿児島県の伝統的な子供の遊戯としての性格を残しながら、団体競技として楽しめるように競技化したことが、現在加治木町で行われているハマ投げの原点であるといえる。

3) 老人クラブとハマ投げ

老人クラブの会員は原則65歳以上とされているが、町役場の担当者によると、70歳になって

から加入する会員が多いという。老人クラブ連合会が組織されたのは昭和38年のことであった。現在加治木町には、各自治会を中心に20の老人クラブがあり、約800名の会員が入会している。

加治木町におけるハマ投げの大会は、この老人クラブ連合会主催で毎年開催され、平成22年で31回を数える。同大会では、老人クラブのチームを中心に、町議会議員や町内の愛好者らのチームが出場し、チーム対抗で行われる団体試合と個人種目「セコ打ち」が行われている(これらの競技法については、次章において詳述する)。大会プログラムは、午前9時開会(雨天の場合は午後開会とする場合や翌日あるいは1週間後に順延などの場合がある)、開会式(会長挨拶、競技法の説明など)の後準備運動を行い、競技が開始される。競技では、まず団体試合が行われ、続いて個人種目「セコ打ち」が競われる。閉会式では、成績発表と表彰が行われ、午後1時頃閉会するというようなものである。

大会参加者によると、ハマ投げの練習は、普段はそれぞれの老人クラブで、広場などにおいて集まれるメンバーだけで不定期に行っているが、特に大会前には参加希望者はできるだけ集まるようにし、用具の確認と練習を行っているということであった。加治木町老人クラブ連合会は、前述のように始良市誕生後は名称変更するが、加治木町役場の担当者によると、加治木町の老人クラブによるハマ投げ大会は、合併後もこれまで同様継続して開催されるとのことである。

以上述べてきたように、加治木町では、老人クラブの有志によってハマ投げが継承されてきた。大会では、子供たちがけがをして危険なため、現在では成人を対象としている(後述)。薩摩の伝統遊戯・ハマ投げは、加治木町の子供たちの間には浸透していないようである。このことは、平成5年10月改訂・増版『基準書』の巻末の「増版を終えて」(前掲)のなかで、老連体育部長・小野氏が「ハマ投げ本来の主意であります、次代の子供との遊びに蘇る事ができますれば幸甚とするところであります。」と述べて、鹿児島県の伝統遊戯・ハマ投げが、加治木町でも子供たちの遊びと

して復活されることを願っていることから窺える。

Ⅲ 加治木町におけるハマ投げの競技法

加治木町におけるハマ投げの用具、競技場および競技法については、次に述べる通りである。

1. 用具

加治木町では、各老人クラブで、手作りの「ハマ」と「ポット」を所有している。この用具の大きさや材質については、『基準書』の「第1章 道具」（平成2年再版，加治木町老人クラブ連合会体育保健部（編），1990，平成5年改訂・増版，加治木町老人クラブ連合会体育保健部（編），1993）において次のように定められている。

「第1条 このハマ投げ大会は、昔の男の子の遊びを継続するものであるゆえに、ポット（スティック）及びハマは自然木の物を原則とする。但し近年雑木山が減少によりポットは入手困難の節も考えられるので、人工ポットを使用するも可とする。

第2条 ハマは材質を問わないが、割れる率が高いので、できるだけ桜の古木で作ること。

第3条 ポットの柄の長さは、各人に合った寸法でよい。ハマは直径6cm、厚さ2cmを大きく超えないこと。」

写真1は、老人クラブ所有の「ハマ」と「ポット」、写真2は保存会で用いられている「ハマ」と「ポット」である。

『基準書』では、加治木で用いられている「ハマ」の材質は桜などで、直径6cm、厚さ2cm程度とされており、材質、形状ともに保存会で用いられている「ハマ」と同様のものである。

また『基準書』では、加治木の「ポット」は、人工のものの使用も可とし、各人にあった長さでよいとされており、太さについては述べられていない。保存会では、「ポット」はヤマグミなどの枝を幹から切り取りゴルフクラブのような形に削って作ったもの（長さ約1m、直径約2cm）を用いている。写真1のように、加治木の「ポッ

写真1 加治木町の老人クラブ所有の「ハマ」と「ポット」（筆者撮影）

写真2 保存会大会での「ハマ」と「ポット」（筆者撮影）

ト」も同様の形状であるが、柄も先端の部分も、保存会のものよりもやや太めに作られているものもみられる。

なお、鹿屋体育大学学長杯大会では、共催である保存会が「ハマ」と「ポット」を準備している。

すでに述べたように、加治木町におけるハマ投げは、共研舎出身の肥田氏が復活させたものであり、同氏が学舎で用いていたものと同じような用具を作り普及させたものである。加治木では今日においてもそれを継承し、保存会の用具と同様の材質、形状の用具が作られ、用いられている。

図1 競技場（『基準書』〈加治木町老人クラブ連合会体育保健部（編），1990〉p. 2の図より編集）

2. 競技場

大会会場である加治木町役場前グラウンドには、図1のように競技場が2面並列で設けられ（第1コート、第2コート）、試合はこの2面を使って同時進行で行われる。

競技場の幅は6m、各競技者間は2mと定められており、縦列に並んだ最後尾の5番目の競技者の後方2mのところにもラインが引かれているが、5番目の競技者は、このラインに関係なく、後方に飛んだハマが倒れない限り「ハマ」の行方を追いかけることができる。

競技規則の詳細については後述するが、図1のように、競技場の中央線の両サイドには白旗が立てられ、打ち返した「ハマ」は両白旗の内側を通ることと定められている。また中央線から5mのところには赤旗が立てられており、先頭の競技者が「ハマ」を投げ入れるときは、「ハマ」がこの赤旗の内側を通過することとされている。赤白の旗と「ハマ」の通過についての決まりは、次節において詳述する。

また、これら2面の競技場の両端のラインを基本線（80—100m）として、個人種目「セコ打ち」が行われる。

3. 競技法

加治木町におけるハマ投げ大会では、すでに述べたように、団体試合と個人種目が行われる。以下、それぞれの競技法について述べることにする。

1) 団体試合

1組5名の競技者が、中央線（白旗を目印とする）から5mのところ（先頭の競技者の位置・赤旗を目印とする）から相対して縦列になり、一方の組の先頭の競技者が、「ハマ」を赤旗の内側を転がすように相手陣地に投げ入れ、相手の組ではそれを打ち返す。「ハマ」を打ち返せずに「ハマ」が倒れると、その組の負けとなる。勝った方の組の先頭の競技者が「ハマ」を投げ入れて試合が続行されるが、縦列の順位が変わらない場合は同じ競技者が2回続けて「ハマ」を投げることはないように交代する。

写真3は、向こう側の先頭の競技者が、手前の組の陣地に「ハマ」を投げ入れようとしているところである。

打ち返した「ハマ」が中央線に立てられた白旗の外側を通ったとき、またはハマが中央線に届かなかったときは失格となり、相手の組の得点となる。

打ち返しに成功し得点を得た組は、先頭の競技

写真3 5名1組で「ハマ」を打ち返し合う（筆者撮影）

者が5番目に、2番目の競技者が先頭に、というように縦列の順位が変わる。勝った組の先頭の競技者が「ハマ」を投げ入れ、競技が続けられる。

打ち返した「ハマ」がラインを越えて陣地の外に出た場合、その「ハマ」が立っている間は、「ハマ」を出した組の競技者が自分の組の陣地内に「ハマ」を打ち戻した後に相手の陣地に打ち返すことができる。

また、5番目（縦列の最後尾）の競技者が「ハマ」を相手陣地にダイレクトに打ち返し、相手の組でそれを打ち返せなかった場合は、得点を2点とする。

大会はリーグ戦で行われる。競技時間は1試合5分で、同じ相手でコートを交替してさらに1試合（5分）行う。すなわち、1対戦につき2試合行い、得失点差で順位を決定する。

平成3年に開催された第12回大会には70代を中心に8チーム約70名が出場するなど、当時は10チーム前後が参加していたようである。第15回大会（平成6年）には8チーム約50名、第16回大会（平成7年）には8チーム約60名が参加、第17回大会（平成8年）には、女性のみのチームも初参加し6チームで競われ、翌9年の第18回大会には7チーム約60名が参加した。しかしながら、その翌年の第19回大会には4チーム、第20回大会には5チーム、第21回大会には4チーム31名の出場、というように、5チーム前後の参加となった。

第22回大会（平成13年）には6チーム36名、

第23回大会（平成14年）には自治会や町議会議員チームも参加し6チーム38名、翌第25回大会には8チーム約50名が出場した。（南日本新聞、1991；1995；1996；1997；1998；1999；2000；2001；2002；2004）

なお、平成15年の第24回大会では、町内の小・中学生にも呼びかけ、約30名の子供たちが参加し賑やかな大会となったことが、南日本新聞（2003）に報じられている。加治木町役場の大会関係者によると、子供たちの参加は何回か続けられたそうであるが、けが人が続出したことから、現在では成人のみの参加としている。

現地調査を行った平成19年の第28回大会には、町議会議員チームも加わり5チーム38名が、翌年の第29回大会には4チーム30名が参加した。このように、近年では、参加チーム数は5チーム前後、参加者数30—40名で推移しており、参加者数は減少傾向にあるといえる。

2) 個人種目「セコ打ち」

団体試合終了後には、自由参加である個人種目の「セコ打ち」が行われる。

「セコ（勢子）」とは、狩猟の際に狩場において鳥獣を駆り出す狩子（人夫）のことであるが、保存会では、ハマ投げに参加する競技者一人ひとりをこの「勢子」に見立て、地面に立てて置いた「ハマ」を「ポット」で打つ個人競技を考案し「勢子打ち」と名付けた（鹿児島市破魔投げ保存会（編）、1968, pp. 8-9）。今日保存会では、これを「置^{おき}打ち」と呼んでいる。加治木では、「勢子」

写真4 「セコ打ち」で「ハマ」を打った瞬間（筆者撮影）

を片仮名表記し、「セコ打ち」としている。

加治木の「セコ打ち」は、一人ずつスタートラインの地面に「ハマ」を立てて置き、それを「ボット」で打ち、「ハマ」の飛距離を競うというものである（写真4参照）。出場者は一人1回ずつトライできる。スタートラインから30 m以内で「ハマ」が白線外に出たとき、または打った「ハマ」が30 mを超えない場合は失格となる。「ハマ」の飛距離を計測し、その記録によって、順位が決定される。

記録の例をあげると、第15回大会（平成6年）の優勝は79 m、第16回大会の優勝は70 m、第18回大会の優勝は90.5 m、準優勝75.5 m、第三位72.4 mであった。なお、第18回大会には当時の町長も出場し、71.4 mで第四位という成績を収めている（南日本新聞、1994；1995；1997）。

平成19年の第28回大会の記録は、優勝73 m、準優勝63 m、第三位58 m、平成20年の第29回大会には18名が出場し、優勝者の記録は83 m、準優勝は79 m、第三位は75 mであった。

Ⅳ 加治木町におけるハマ投げの特色

以上、加治木町におけるハマ投げの形態と展開について明らかにしてきた。本章では、それらをふまえながら、加治木町におけるハマ投げの特色

について、今日それぞれの競技法で大会を開催している保存会、鹿屋体育大学におけるハマ投げの場合と比較しながら述べてみたい。

1. 競技スポーツ的要素を加味した独自のルール

まず、加治木町におけるハマ投げの競技法の独自性について述べてみたい。

加治木町におけるハマ投げの最も大きな特色は、伝統的な競技法をふまえたうえで、競技スポーツ的要素が加味されているという点である。

たとえば、陣地の外に出た「ハマ」を自分の陣地内に打ち戻した後に相手陣地に打ち返すことができる、というルールは、バレーボールにおいて、コートの外に出たボールを追いかけて、味方に戻すか、または相手コートに返すことができるというルールと同様の原理であるといえる。このような「ハマ」の処理は、伝統的な競技法にはない加治木町独自の競技スポーツ的特色をもつルールである。また、「セコ打ち」も、加治木町独自の近代的なルールで行われている。

保存会では、昭和43年の第5回大会から、個人種目である「置打ち」（別称「勢子打ち」）が設けられた。この「置打ち」は、「ハマ」を地面の「置打ち定点」に立てておき、それを「ボット」で打ち、「ハマ」が達した距離によって、初級（20 m以上）、中級（30 m以上）、上級（50 m以上）の認定証が授与されるというもので、「置打ち定点」から20 mのところには2本の旗が立てられており（両旗間は5 m）、打った「ハマ」がその両旗の内側を通過しなければならない（鹿児島市破魔^{ハマ}投げ保存会（編）、1968；発行年不詳）。

加治木の「セコ打ち」では、すでに述べたように「ハマ」の飛距離の記録を競うというものであり、このような点にも、「競争」を重要な要素とする競技スポーツの性格が窺える。

2. 高齢者に優しいハマ投げ—生涯スポーツとしての再生—

以上述べてきたように、加治木町におけるハマ投げは、競技スポーツ的要素が強いにもかかわらず

ず高齢者がけがもなく楽しんでいるという点が、生涯スポーツの観点から特に注目される。

加治木町の大会には、前述のように、かつては子供たちも参加していた。老人クラブ連合会関係者によると、大会では、「ハマ」が顔に当たるなどしてけがをする子供が続出したことから、子供たちの参加を見合わせ成人のみを参加者としたとのことである。現在大会では、成人の参加者のみでけが人も無く楽しまれている。

薩摩藩時代以来の伝統的競技法では、ハマ投げの競技場は、馬場や道路など、それを行う場所全面を試合場とし、境界線は設けられていなかった。鹿屋体育大学では、現代スポーツとしてこの遊戯を再生させるための試みとして、競技場にサイドラインとエンドラインを設けて区画（15 m × 60 m）を明確にし、打ち返せなかった「ハマ」が自陣の区画を超えた場合は、その組の負けとすることとした。

加治木町の場合も、サイドラインを設け、そのラインを超えた「ハマ」の処理のルールも加えられるなど、この遊戯の競技性を高める工夫がなされていることは注目される。

また、保存会の競技法では、振った「ボット」が前後の競技者に当たらないように、競技者間を5 m としており、鹿屋体育大学でもそれを踏襲し5 m としている。それに対して、加治木町のハマ投げの競技場は、幅6 m、各競技者間は2 mとされている。この競技者間2 mというのは、明治期学舎におけるハマ投げの競技者間隔（約1間：約1.8 m）に近いものである。

加治木町におけるハマ投げの特徴としては、すでに述べてきたように、『基準書』が作成され、競技法が、高齢者にもわかりやすいように明確に示されている。そして、その競技法は、競技スポーツの要素も加味されているが、高度な技術を必要とするものではなく、また、手作りの用具などにも伝統遊戯の素朴さが残されている。団体試合では、多くの競技者が、動いている（転がっている、あるいは飛んでいる）「ハマ」を打ち返すのではなく、「ハマ」が静止するのを待って打ち返しており、また「ハマ」が勢いよく打ち返され

る場面も少なく、「ハマ」が止まって倒れるまでのラリーも長く続かない試合が多くみられた。したがって、複数の競技者が同時に「ハマ」を追って打とうとすることによる危険性や、打った「ハマ」や振り回した「ボット」が競技者に当たってけがをするという危険性も低く、運動量も適度であると見受けられた。このようなことから、加治木町におけるハマ投げは、高齢者にとって、安全で優しい競技として再生されていると考察される。

しかしながら、前述のように、加治木町の大会では子供たちにけがが続出したことから、子供たちも安全に楽しめるように競技法を工夫するとともに、普段から子供たちがこの遊戯に親しむ機会を設けることも必要であると考えられる。

たとえば、保存会主催の大会の場合では、参加している子供たちのチームは、所属する学舎での予選を勝ち抜いてきており、「ハマ」や「ボット」の扱い方や、それらが当たることによる危険性も周知している。また自顕流の稽古なども含め、普段から学舎の活動のなかで薩摩の伝統的身体運動文化を実践し継承している。保存会の大会では、子供たちも含めほとんどがこの遊戯の経験者であり、大きなけがをすることも減多に無いようである。

加治木町においても、日頃から、地域の高齢者の指導のもとに子供たちがハマ投げを行う機会を設けたり、また学校教育プログラムに同遊戯を取り入れ、高齢者と共に実践することなどを通して、地域と学校の連携のもとに、加治木町の子供たちに、自分たちがこの遊戯の担い手として継承していくという意識を涵養することも、この薩摩の伝統遊戯の生涯スポーツにおける再生と発展を考察するうえで、重要な課題であると考えられる。

安全面の検討については、次節で述べることにする。

3. 加治木町におけるハマ投げの課題—特に安全面について—

すでに述べたように、加治木町の大会では、参加者は老人クラブのメンバーが多いことから、「ハマ」があまり飛ばず、スピードもあまりない。

ラリーも長くは続かない場面が多くみられる。また、「ハマ」が止まってから打つケースが多く、競技はゆっくり進行する。これらのことから、高齢者の場合は、2 m という現在の競技者間隔でも危険性は低いとみられる。

しかしながら、子供たちの試合では、高齢者の場合に比べて運動量が多く、また「ハマ」を打つ力が強く「ハマ」が勢いよく飛ぶことから、「ハマ」が競技者に当たる危険性が高い。したがって、競技者の間隔が2 m という現在の競技法は、子供たちがけがをすることの一因であるとも考えられる。また、年齢を問わず、「ハマ」を打とうとして振り回した「ボット」が別の競技者に当たったりする場面も想定される。

したがって、今後加治木町において子供たちにもこの遊戯を普及させるためには、安全面から競技者の間隔を再検討し、保存会や鹿屋体育大学の場合と同様の5 m またはそれ以上とすることが望ましいと考える。各競技者の間隔を拡げることにより守備範囲が大きくなり運動量も増加するが、保存会大会に参加している高齢者をみても、5 m 間隔でも体力的に負担になっていないようであり、小・中学生も高齢者も勇壮なプレイを披露している。また、本稿の冒頭においても述べたように、加治木町老人クラブ連合会のメンバーも鹿屋体育大学主催の大会に参加したことがある。その大会では、連合会チームの高齢者たちも、体育大学が設定した大きさの競技場内を「ハマ」が超えるまで追いつけていたことなどから、競技者間の拡張については、体力的にも問題は無いように見受けられた。

ところで、鹿屋体育大学の大会では、大学近隣からの参加者の多くが初心者であることから、アイスホッケー用のフェイスガード付きヘルメットの着用を導入するなど、安全性に配慮していることも特筆される。加治木町の場合も、競技場の設定の検討とともに、このような用具の導入などの工夫も必要であると考えられる。

加治木町の大会には、老人クラブのメンバーを中心に同町のハマ投げ愛好者が参加しているが、年々高齢化し参加者が減少してきているなかで、

この薩摩の伝統的運動文化を、次代を担う青少年にいかにつづけていくかが問われるところである。加治木町において、子供たちにも安全で楽しい競技としてこの薩摩の伝統遊戯を普及させていくためには、本節において述べたような、安全面により配慮した競技法の工夫・検討が必要であるといえる。

V おわりに

本研究では、薩摩・大隅地方におけるハマ投げについて、加治木町の場合を中心に明らかにし、伝統遊戯の現代における再生と発展という観点から考察を行った。

冒頭においても述べたように、「郷中教育」における武芸の鍛錬の意味も兼ねた遊戯として行われ、近代においても「学舎」の教育のなかで、男子の勇壮な遊戯として盛んに行われていた薩摩のハマ投げは、一時衰退をみるが、学舎連合会が中心となって保存会が組織され、伝統的競技法を踏襲して復活され今日に至る。薩摩のハマ投げは、薩摩藩士の勇壮な精神を脈々と今日に伝えてきたことが、保存会大会に参加している子供たちの勇壮なプレイからも窺える。

加治木町におけるハマ投げの場合では、本研究で明らかにしてきたように、老人クラブ連合会によって、高齢者にも適度な運動量で安全に行うことができ、かつ近代的な要素を取り入れた独自の競技法が定められ、正月の行事として同遊戯の大会が開催されている。藩政時代の文化を伝承し、かつ楽しく活動することを企図して、高齢者が担い手となって競技法が工夫され継承されてきた加治木町におけるハマ投げは、生涯スポーツにおける伝統スポーツの一つの在り方を提示しているといえる。

それに対して、保存会によるハマ投げでは、伝統遊戯の保存という立場から、伝統的な競技法を重視しており、また、鹿屋体育大学の場合は、生涯スポーツとしてのこの伝統遊戯の再生と普及という観点から競技法を検討している点に、それぞれ特色があるとまとめられる。

このように、薩摩のハマ投げが、組織や担い手によって、伝統に基づきながらもそれぞれの目的に応じて独自の競技法が工夫され今日まで継承されているということは、生涯スポーツにおける伝統遊戯・伝統スポーツの再生と発展という観点から注目される。

また、「伝統」への見直しと「伝統文化」への注目が高まっている今日、本研究において明らかにしたような薩摩のハマ投げの実態は、日本の伝統的な身体運動文化を再認識し、それを現代において継承していくことの意義と課題を考察するうえでの手がかりとなる事例としても位置づけられる。

付記

本研究は、日本体育学会スポーツ人類学専門分科会研究補助金、科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）、課題番号：22500548）、鹿屋体育大学重点研究プロジェクト事業経費等による研究の一部である。

注

注1) 打毬は、古代西アジアにおいて行われていた馬上から球を打ち合う遊戯が、中国大陆を経て古代日本に伝わり生まれたとされる（寒川，1994）。したがって、西洋のポロと同じ起源をもつ遊戯であると考えられる。打毬の記録は平安中期までみられるが、10世紀末までに衰退、代わって、その打毬から生まれたと考えられる、二手に分かれて徒歩で毬を打ち返し合う毬打（毬杖）が、庶民や子供たちの遊びとして日本各地に広まった（渡辺，2001）。毬打は、地方によって名称や形態を変えながら行われ、特に江戸時代から明治期にかけて盛んであった。

注2) 鹿児島市破魔投げ保存会（同会編，1968）によると、この遊戯の名称は、「輪」を意味する方言で「ハマ」と呼ばれる円盤形の木の球を用いることに由来するという説から、片仮名で「ハマ投げ」と表記されることが多いが、「破魔弓的」を「破魔」と呼ぶことに由来する正月の遊戯としてこの名称が生まれたとも考えられており、その場合は「破魔投げ」と表記される。

薩藩文書におけるこの遊戯の初出とみられる「薩藩舊傳集 卷三」（薩藩叢書刊行會（編），1906）所収の文書では、「はまをなけ…」というように平

仮名表記されている。また、『薩藩先公遺徳 下』（岩切（編），1860）では、「浄國院様…兎二才破魔ナケ候ヲ被遊 御覧（後略）」というように漢字で表記されている。民俗学的文献（柳田，1969；大田，1968など）においては、片仮名表記が多くみられる。現在保存会では、「破魔」に片仮名の振り仮名を付して「鹿児島市破魔投げ保存会」と表記し、正式名称としている。加治木町の場合は、「ハマ投げ」と表記しており、鹿屋体育大学では、保存会との共催による大会でもあることから、大会名称には、漢字を用いて「学長杯破魔投げ大会」としている。現在の新聞等においても、「ハマ投げ」と表記される場合が多い。

以上のように、ハマ投げの表記は、史料や文献によって異なる。また、遊戯の由来によって名称の表記も異なると考えられる（この遊戯の名称と由来、表記については、山田，2003、などを参照されたい）。筆者らは、民俗学的研究の成果に基づき、「ハマ投げ」と表記することとしている。遊戯の由来と名称、表記との関係については、今後さらに史料調査を行い、明らかにしていきたいと考えている。

注3) 以下、薩摩のハマ投げの形態と展開、保存会と鹿屋体育大学における実態に関しては、これらの拙稿を参照されたい。

注4) 「郷中教育」とは、武道をたしなむことを第一に、文武両道と心身の錬成を目的として、居住区域を同じくする青少年が集まり、年長者が年少者を指導しながら学問や武芸の稽古を行うという、薩摩藩に固有の教育組織であった。鹿児島城下の「郷中教育」は、概ね次のような日課で行われていた。稚児（小稚児：6、7—10歳、長稚児：11—14歳）は、朝食の前に先生である二才（14、15—24、25歳）の家に行き四書五経などを読み、書を習い帰宅する。朝食後再び集合して水泳、山登り、川遊び、角力、鳳揚げ、綱引きなどを行い帰宅、午後は、「座元」あるいは「席」と呼ばれる持ち回りの当番の家で復習し、その後午後6時まで主として武芸の稽古を行った。（鹿児島縣，1944；鹿児島縣教育會編，1907；松本，1943）

鹿児島城下では、「郷中教育」における勇壮な遊びとして、ハマ投げが武家の子弟の人気を集め、道路や馬場、空き地などにおいて、特に冬季に盛んに行われていた。また、学問や武芸の稽古が行われない正月の休みには、武芸の稽古に代わる身体鍛錬として行われるなど、武芸の鍛錬も兼ねていた。（山田，2003）。

注5) 「郷中教育」の思想と形態は、明治維新後も「学舎」の教育として継承され、心身の錬成が行われてきた。「郷中教育」出身者ら有志によって鹿児島市内外に創設された(後には旧郷中を基盤としない学舎もつくられた)「学舎」の教育では、薩摩藩時代以来の伝統的な精神を継承し舎員相互に健全な身心の錬成を図ることを目的としていた。6, 7歳から24, 25歳以下を正舎員, 25, 26歳以上を特別舎員とし、その日課は概ね、平日では、放課後各自学舎に出舎し1—2時間学習や読書を行い帰宅、午後7時に再び出舎し1—2時間程度復習・予習を行うというようなものであった。運動については、毎日あるいは曜日を決めて一定の運動時間を設ける学舎などさまざまで、季節に応じた運動や武芸の稽古、遊戯などが行われた。特に、鹿児島市内の学舎では、ハマ投げが、薩摩藩時代の精神を伝える男子の勇壮な遊戯として盛んに行われていた。

第二次世界大戦によって、学舎は多くの青年舎生を失い、また舎屋を焼失するなどの打撃を受け、戦後の占領政策のなかで一時活動を停止する。しかしながら、戦後の復興のなかで、青少年の教育のよりどころとして「学舎」を再建しようという気運が高まり、昭和26年学舎連合会が組織され「学舎」が再興されるに至った。(鹿城学舎出身東京帝国大学学生会編, 1915; 鹿児島県, 1943b; 鹿児島県教育委員会(編), 1970; 1971; 鹿児島市破魔投げ保存会編, 1968)

現在では10の学舎が存続しており、そのうち、鶴尾学舎など4学舎では道場が開かれ、野太刀自顕流の稽古等を通して心身の錬成が行われている。「学舎」の教育とハマ投げについては、拙稿(山田, 2003; 2004)を参照されたい。

注6) 薩摩藩は、薩摩、大隅2国と日向国の一部を領有し、また琉球を支配下に置いていた。藩領は、城下と南西諸島を除き100余の外城に分かれていた。延享元(1744)年以降外城の数は113(地頭所92, 私領21)に定まり、天明4(1784)年外城は「郷」と改称された。大隅国には、加治木など7郷(私領)があり、加治木郷は、薩摩藩の交通の要衝地であった。廃藩置県に伴い、当初は鹿児島県、後に都城県所属を経て、明治5年鹿児島県所属となった。同郷には明治5年郡治所が置かれたが、翌年廃止され第1支庁が置かれ、その後59大区を経て、同12年には郡役所が設置された。また、明治10年に起きた西南戦争による戦禍を回避するため、その年から約1年間仮県庁が置かれて

いた。明治22年町村制施行によって加治木郷は加治木村と改められ、明治45年鹿児島県内で最初の町村施行により加治木町となった。(鹿児島県, 1943a; 加治木郷土誌編纂委員会, 1966, pp. 208-210; 木村編, 1988; 大石編, 2006, 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編, 1983)

注7) 共研舎は、明治12年に設立された。大正2(1913)年6月の調査では、全舎員数600と報告されており、当時存立していた15学舎のなかで2番目に多い舎員数であった。撃剣施設を有し、鉄棒やテニスコートも設けられていた。大正10年財団法人共研舎となり、大正13年舎内に共研幼稚園が創設された(現・学校法人共研舎学園共研幼稚園)。共研舎では、「学校教育と家庭教育の連絡を図り、質朴剛健な青年子弟を養成する」ことを目的に「修練、奨学及び幼児教育」を主な事業としており、野太刀自顕流の研修なども行われている。(鹿城学舎出身東京帝国大学学生会編, 1915; 鹿児島県ホームページ; 共研幼稚園ホームページ)

注8) 藩政期加治木では、天明4(1784)年四代久徴(寶暦2年—文化6年: 1752年—1809年)が創設した鎮英館において武家の子弟の学問教育が行われ、「郷中教育」では心身の錬成が重視されていた。その精神は、明治に入り、杓街青年研究会(後に「有為舎」に改称)、郁文館、青雲舎が開設され、「学舎」の教育として継承された。(加治木町老人クラブ連合会編, 1983, pp. 34-39, pp. 82-84, pp. 86-88, p. 134; 加治木村同盟教育会編, 1911, pp. 263-269)

注9) 以下、引用文の句読点は原文のまま(「、」「。」)とする。

文 献

- 学校法人共研舎学園共研幼稚園ホームページ <http://www18.ocn.ne.jp/~kyouken>. 2010年6月27日閲覧。
- 鹿城学舎出身東京帝国大学学生会(編)(1915) 学舎の研究 第一輯: 19-25.
- 岩切実和(編)(1860) 薩摩先公遺徳 下. 出版者・出版地不明.
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会(編)(1983) 角川日本地名大辞典 46 鹿児島. 角川書店: 東京, pp. 188-189.
- 鹿児島県(1943a) 鹿児島県史 第二巻. 鹿児島県: 鹿児島.
- 鹿児島県(1943b) 鹿児島県史 第四巻. 鹿児島県: 鹿児島.
- 鹿児島県(1943c) 鹿児島県史 別巻. 鹿児島県: 鹿児島.

- 島.
 鹿児島縣 (1944) 郷土史読本. 鹿児島縣: 鹿児島.
 鹿児島県ホームページ <http://www.pref.kagoshima.jp/kurashi-kankyo/koekihojin/tokurei/kyouiku.html>. 2010年6月27日閲覧.
 鹿児島縣教育會 (編) (1907) 薩藩土風沿革. 日本警察新聞社出版部: 東京.
 鹿児島県教育委員会 (編) (1970) 鹿児島県教育史 上巻. 鹿児島県立教育研究所: 鹿児島.
 鹿児島県教育委員会 (編) (1971) 鹿児島県教育史 下巻. 鹿児島県立教育研究所: 鹿児島.
 鹿児島市破魔投げ保存会 (編) (1968) 破魔投げ記念誌. 鹿児島市破魔投げ保存会: 鹿児島.
 鹿児島市破魔投げ保存会 (編) (発行年不詳) 破魔投げの由来と競技法. 鹿児島市破魔投げ保存会: 鹿児島.
 加治木郷土誌編纂委員会 (編) (1966) 加治木郷土誌. 加治木町: 鹿児島.
 加治木町ホームページ <http://www.synapse.ne.jp/~kajiki/no-flash-m.html>. 2010年2月14日閲覧.
 加治木町教育委員会 (1991) わたしたちの故郷かじき. 加治木町教育委員会: 鹿児島.
 加治木町老人クラブ連合会 (編) (1983) 加治木風土記. 加治木町老人クラブ連合会発行: 鹿児島.
 加治木町老人クラブ連合会体育保健部 (編) (1990) 加治木町ハマ投げ大会基準書. 加治木町老人クラブ連合会体育保健部発行: 鹿児島.
 加治木町老人クラブ連合会体育部 (編) (1993) 加治木町老人クラブ連合会ハマ投げ大会基準書. 加治木町老人クラブ連合会体育部発行: 鹿児島.
 加治木村同盟教育會 (編) (1911) 加治木郷土史料. 加治木村同盟教育會: 鹿児島.
 木村礎他 (編) (1988) 藩史大事典 第7巻 九州編. 雄山閣出版: 東京, pp. 535-552.
 松本彦三郎 (1943) 郷中教育の研究 (復刻版). 大和学芸図書: 東京.
 南日本新聞, 1991年1月7日付朝刊.
 南日本新聞, 1994年1月7日付朝刊.
 南日本新聞, 1995年1月7日付朝刊.
 南日本新聞, 1996年1月8日付朝刊.
 南日本新聞, 1997年1月14日付朝刊.
 南日本新聞, 1998年1月14日付朝刊.
 南日本新聞, 1999年1月21日付朝刊.
 南日本新聞, 2000年1月11日付朝刊.
 南日本新聞, 2001年1月9日付朝刊.
 南日本新聞, 2002年1月23日付朝刊.
 南日本新聞, 2003年1月24日付朝刊.
 南日本新聞, 2004年1月21日付朝刊.
 大石学 (編) (2006) 近世藩制藩校大事典. 吉川弘文館: 東京, pp. 937-941.
 大田才次郎 (編) (1968) 日本児童遊戯集 (覆刻: 『日本全国児童遊戯法』〈博文館刊, 1901〉). 東洋文庫: 東京.
 薩藩叢書刊行會 (編) (1906) 薩藩舊傳集 卷三 (薩藩叢書 第一編). 薩藩叢書刊行會: 鹿児島, pp. 315-316.
 瀬戸口照夫 (1995) 「ハマ投げ」に関する研究—南九州を中心として—. 日本体育学会大会号, 46: 692.
 寒川恒夫 (1994) ぎっちょ. 日本体育協会監 スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, pp. 202-203.
 寒川恒夫 (1998) ホッケー. 大林太良編 民族遊戯大事典. 大修館書店: 東京, p. 193.
 渡辺 融 (2001) 日本中世の体育・スポーツ. 木村吉次編 体育・スポーツ史概論. 市村出版: 東京, pp. 37-38.
 渡辺 融 (2007) リレー随筆 28. 財団法人野球体育博物館編 Newsletter, 17(1): 8.
 山田理恵 (2003) 薩摩の「ハマ投げ」に関する研究. 体育史研究, 20: 13-22.
 山田理恵 (2004) 「ハマ投げ」の近・現代—鹿児島における「学舎」の教育を中心に—. 中京大学体育研究所紀要, 18: 49-58.
 山田理恵 (2005) 伝統遊戯から現代スポーツへ—薩摩の『ハマ投げ』の復活と現状—. 東北アジア体育・スポーツ史学会第6回大会抄録集: 7-8, 148-149 (韓国語訳), 285-286 (中国語訳).
 山田理恵 (2007) 日本の伝統打球戯の形態とその変遷に関する研究 (平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2)研究成果報告書).
 Yamada, R. (2008) The promotion of the traditional Japanese stick game: the Satsuma game of *hamanage* (or disk-throw). 50th ICHPER・SD Anniversary World Congress 2008, Program and Proceedings II: 448-454.
 山田理恵・渡辺 融 (2008) 桑名義塾の打毬戯—桑名市立立教小学校における実践について—. 日本体育学会第59回大会予稿集: 341.
 柳田國男 (1969) 左義長問題. 柳田國男 定本柳田國男集 第11巻 (新装版) 『神樹篇』. 筑摩書房: 東京, pp. 64-70.

(平成22年2月25日受付)
 (平成22年11月15日受理)